

青森県の船絵馬

昆 政明¹⁾

The report of the votive picture which prayed for the safety of the voyage " Funaema "
in Aomori Prefecture
Masaaki KON

Key words : 船絵馬、吉本善京、杉本清舟、絵馬藤、北前船

1 はじめに

古来より日本では神に願いをかけるときには、生きた馬を奉納する風習があった。しかし、生馬の奉納は経済的に大きな負担となるため、生馬に代わりに木製や土製の馬形を奉納する風習が生じ、後には、板に馬の姿を描いて奉納するようになった。これが絵馬の起源であると考えられている。現在でも絵馬に「馬一疋」と書かれるのはそれを裏書きしている。奈良の長屋王邸跡や、静岡県浜松市の伊場遺跡からは、馬を描いた木板（絵馬）が出土しており、こうした風習は、奈良時代まで遡ることが確認できる。

当初、馬の姿に限られていた図柄も、室町時代の中期になると、祈願の内容に即したものが現われるようになった。画題として選ばれたのは、馬図をはじめ祭礼、物語、武道、歌仙絵、芸能、芸道、学問、生産、生業など多種多様である。船を描いた絵馬が現れるのは、江戸時代の初期、寛永年間のことである。京都清水寺に奉納された末吉船や角倉船などの朱印船を描いた4面の絵馬は、和洋折衷の船体構造や乗船者の風俗など、当時を物語る貴重な資料として、国の重要文化財に指定されている。

本県にも、西津軽郡深浦町の円覚寺に、これらと同時代の船絵馬が残されている。寛永10(1633)年、越前国敦賀の庄司太郎左衛門が奉納した船絵馬には、当時の日本海海域で用いられた北国船が描かれている。この絵馬は、北前船を描いた絵馬や鬚の絵馬（鬚額）などとともに、国の重要有形民俗文化財に指定されている。（写真7）

今回報告の対象とする「船絵馬」は、絵馬の図柄に船を描いたものの中で、一定の様式を持つものである。これらは18世紀中頃に出現し、幕末から明治時代にかけて広く奉納されるようになったもので、基本的には帆走する弁才船を横位置からとらえ、画面一杯に描くといった共通の構図をもつ。自分の持ち船や乗船が描かれ、奉納年月日、船名、奉納者、居住地などが明記されるのが多い。また、描写には写実性が求められ、専門の絵師によって製作されたものがほとんどで、船体の形や、艀装、帆の反数、乗組員の人数等に注意が払われている。

こうした船絵馬の多く残る地方は北陸から東北、北海道にかけての日本海沿岸地方で、太平洋沿岸の地域には、非常に少ないのが特徴である。青森県には約500点の船絵馬が確認できるが、奉納数の多いのは全国の傾向と同様、西海岸地方、津軽半島、下北半島沿岸で、太平洋沿岸にはほとんど残されていない。また、船絵馬の奉納が盛んとなる時代は、上方と蝦夷地（北海道）を結んだ北前船の活動が盛んとなる時代と軌を一にしており、船絵馬の奉納者の中心は北前船関係者によるものと考えられる。

船絵馬は信仰資料としてはもちろん、弁才船の変遷を知る上でも貴重な資料である。船絵馬師の系譜や作風、また、船体・艀装の変遷等に関する造船技術資料としても、注目されている。一例として、船体の舷側（げんそく）に装着された蛇腹垣の変化がある。蛇腹垣は、積荷の荷崩れを防ぐとともに、波浪から積荷を守るために設けられるものである。積載量の増大と共に、蛇腹垣の構造が強化され、それと共に、蛇腹を支える垣立の構造が変化していく様子を、読み取ることができる。（写真1-1～1-6）また、帆装の面からは、江戸時代末期から明治時代にかけて、洋式の帆装を取り入れていく様子を見ることが出来る。（写真2-1～2-2）

本報告では青森県内に残る船絵馬について、船絵馬師の側面から記述するとともに、特徴的な船絵馬について解説を加えることとしたい。

2 船絵馬の作者

北前船の起点である大阪（大坂）には、船絵馬と得意とする絵馬屋が多かった。船絵馬を得意とする絵馬作者をここでは船絵馬師と称することとする。船絵馬師として名前が上げられるのは、吉本善京、杉本清舟、吉川芦光、吉川芦舟、吉村重助、平井義重、絵馬藤らでいずれも大坂で活躍した船絵馬師である。中でも吉本善京・杉本清舟・絵馬藤は作例が多く、代表的な船絵馬師と考えられている。

1) 青森県立郷土館 学芸員（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

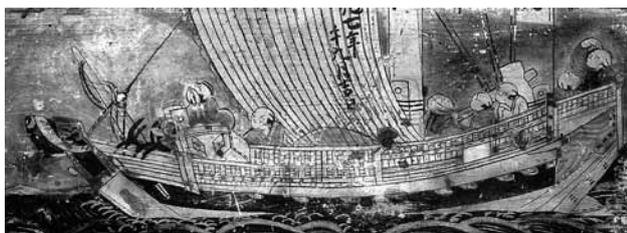


写真 1-1 文化 7(1810)年 むつ市脇野沢新井田八幡宮蔵

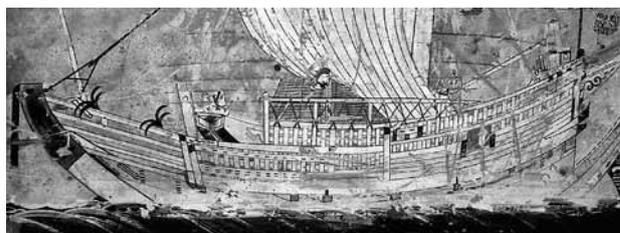


写真 1-3 文政 8(1825)年 深浦町関八幡宮蔵

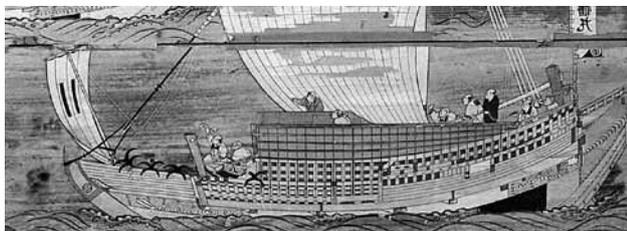


写真 1-3 天保 7(1836)年 深浦町円覚寺蔵

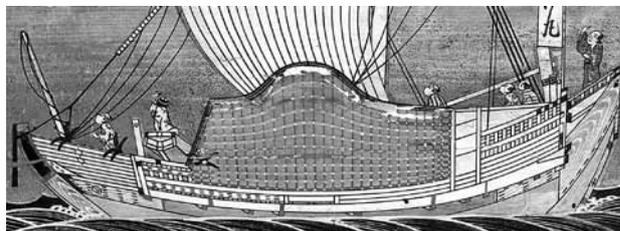


写真 1-4 嘉永 3(1850)年 深浦町円覚寺蔵

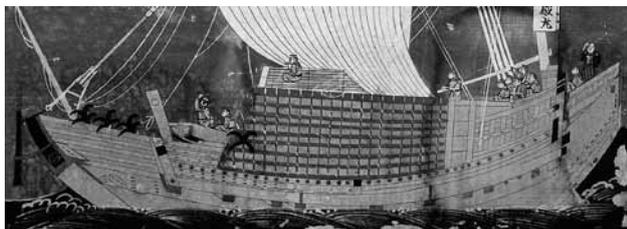


写真 1-5 嘉永 2(1849)年 鯨ヶ沢町白八幡宮蔵

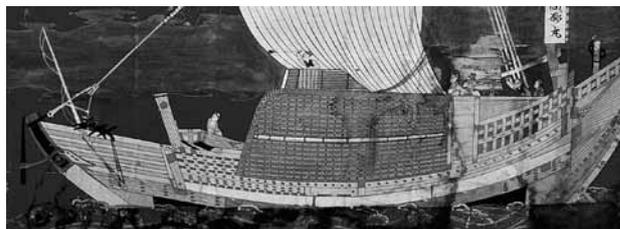


写真 1-6 明治 2(1869)年 鯨ヶ沢町白八幡宮蔵

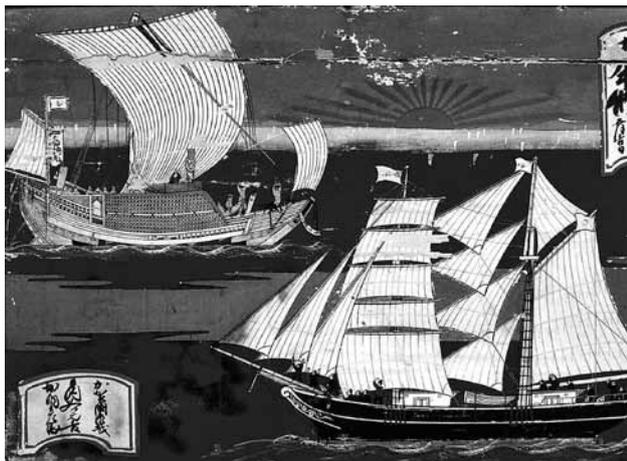


写真 2-1 嘉納丸と洋式帆船図 明治 20(1887)年

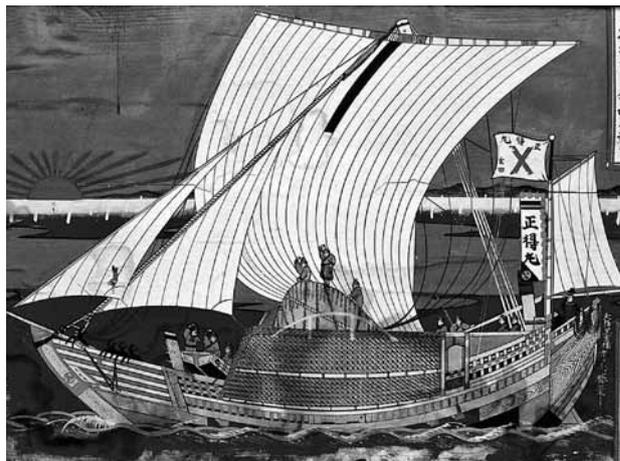


写真 2-2 正得丸図 明治 27(1894)年

船絵馬師の系譜については石井謙治（1977）の著述に詳しい。ここではそれに従って船絵馬師の系譜を略述する。

船絵馬師で主流をなしたのは吉本善京と杉本清舟の系統である。彼らは文化年間に相次いで落款入りの船絵馬を製作している。吉本善京の最も古い落款入り船絵馬は文化 8(1811)年のものである。吉本善京はこれを初代とし、文政 9(1826)年には2代目吉本善京に代替わりした。2代目吉本善京は、文政 13(1830)年に吉本善興景映と改名する。天保 12(1841)年には3代目に代替わりして吉本善興と名乗るが、天保 12(1841)年には吉本善京に戻している。

3代目吉本善京は、嘉永年間に入ると、描くのに手間のかかる船体部分の描写に版画を利用することを考案し、船絵馬の量産化に道を開いた。後には、版画の利用が一般的な船絵馬の製作方法となり、安価な船絵馬を大量に供給することが可能となり、一般の水主階層にも船絵馬の奉納が広まることとなったが、反面、船絵馬の類型化をもたらすこととなった。奉納された船絵馬の中で、船体部分が白く抜け落ちたものが見られるが、白い部分は張り付けた版画部分がはげ落ちたものである。(写真3)

杉本清舟も初代から3代まで代替わりするが、吉本善京のように版画を利用する製作方法をとらず、安政年間に活動を停止する。

明治時代に入ると、絵馬藤（えまとう）製作の船絵馬が多く奉納されるようになる。落款は明治 2(1869)年が上限であるが、明治時代に大活躍する。船絵馬の裏面に貼られた引き札には「大坂北堀江 黒金橋北詰 絵馬 羽子板 えんま藤」と記されている。吉本善京、杉本清舟が姿を消した後は、絵馬藤が一大勢力となるが、それ以外の船絵馬

師としては吉川芦光、吉川芦舟、吉村重助、平井義重らの名前を上げることが出来る。これらの作者はいずれも船体部分の描写に版画を用いている。(石井謙治 1977)

船絵馬の構図は各作者によって大きな違いは無いが、船体細部の描き方や人物の描写にはそれぞれ特徴を見つけることが出来る。なかでも吉本善京と絵馬藤には明瞭な識別点がある。

吉本善京は、帆柱の先端に取り付けられた蟬（滑車）の描き方に特徴がある。図2にあるように、吉本善京の描く蟬は実際の形を簡略化したもので、二本線に穴がひとつ乗った形にデフォルメされている。吉本善京以外の作者は実際の蟬の形を描いている。この描き方は吉本善京の初代から3代まで同一である。絵馬藤の描き方で特徴的なのは、船体後部にある艫車立（トモノシャダツ）と隅立（スミタツ）の描き方である。絵馬藤は、実際とは違い艫車立を隅立より低く描いている。絵馬藤以外は正確に艫車立を隅立より高く描いている。船絵馬の中にはこの二つの特徴を兼ね備えたものがある。このことは絵馬藤は吉本善京から独立した可能性を示唆している。

吉本善京と絵馬藤以外の作者については、人物の特徴によって識別できる。杉本清舟は船の表（船首より）の人物描写に特に特徴があり（写真 4-1～4-2）、吉川、吉村、平井は舵柄を操作する人物の描き方に特徴がある。（写真 4-6～4-8）

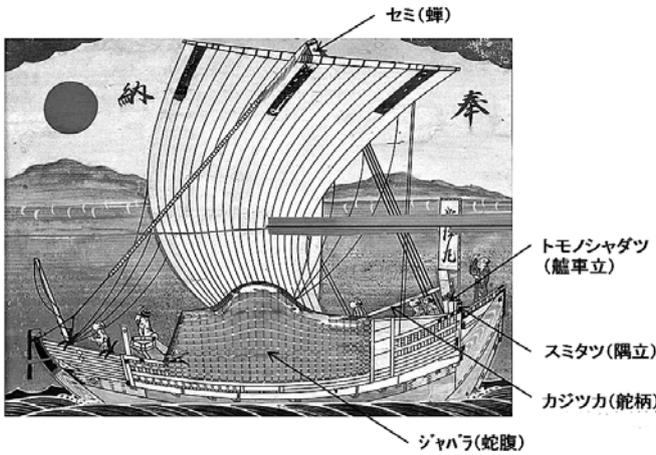


写真3 版画が剥がれた船絵馬（右2点）

図1 関係各部名称図

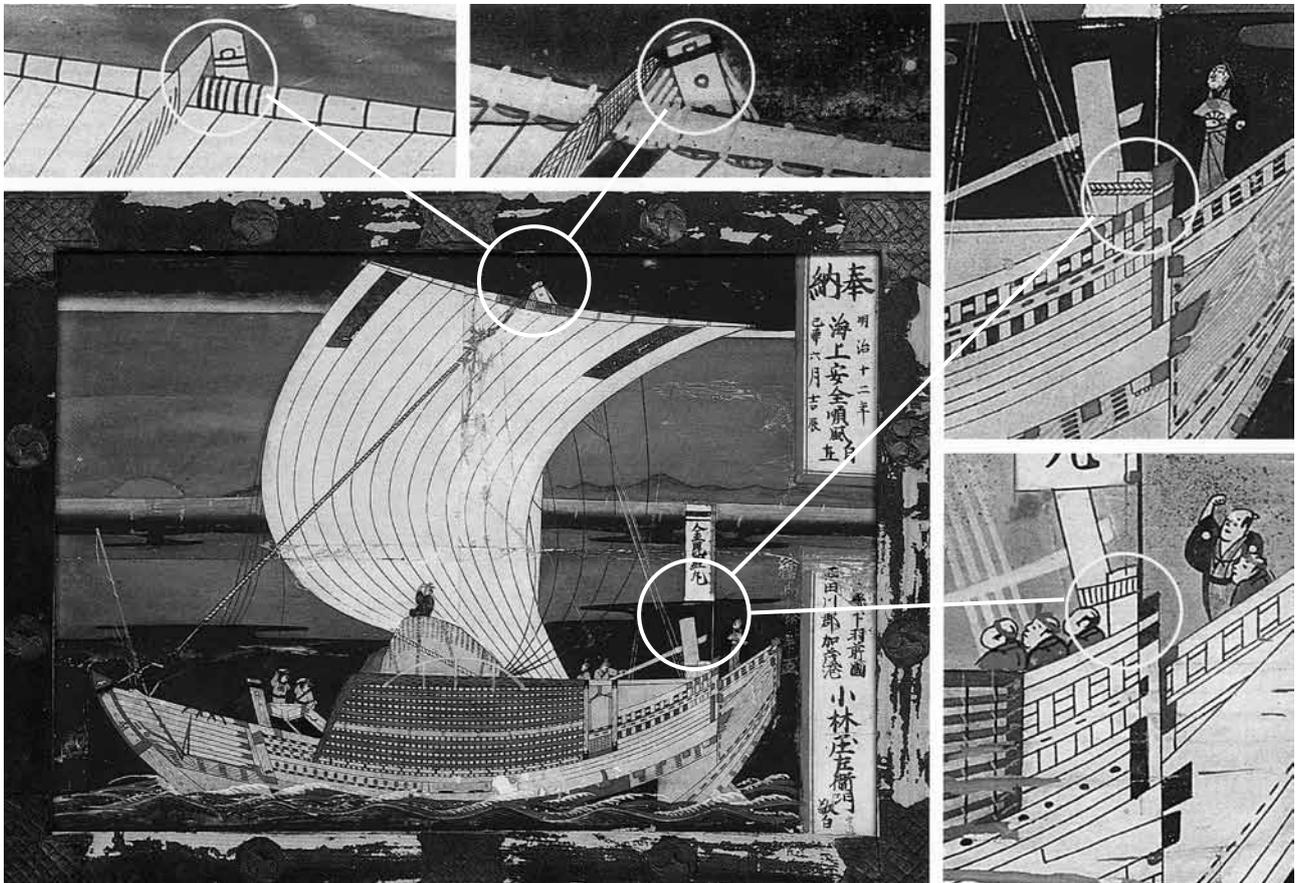


図2 吉本善京と絵馬等の識別方法

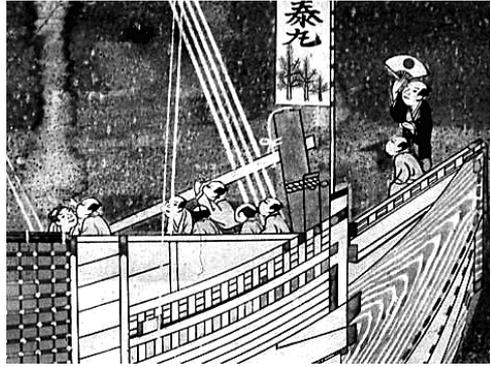
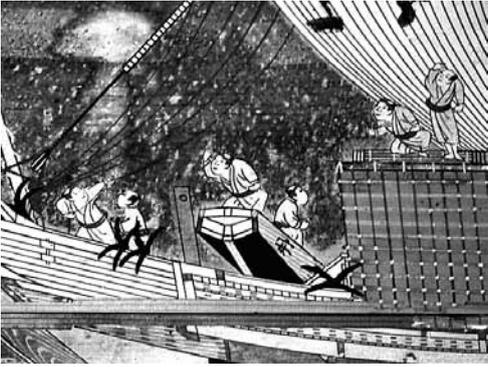


写真 4-1
杉本系 (2代目)

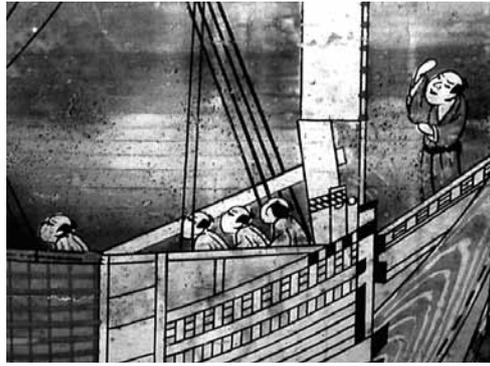
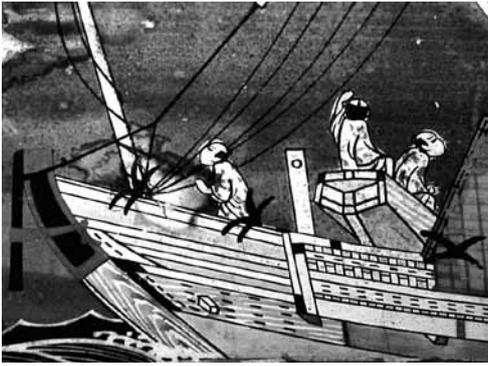


写真 4-2
杉本系 (3代目)



写真 4-3
吉本系 (初代)

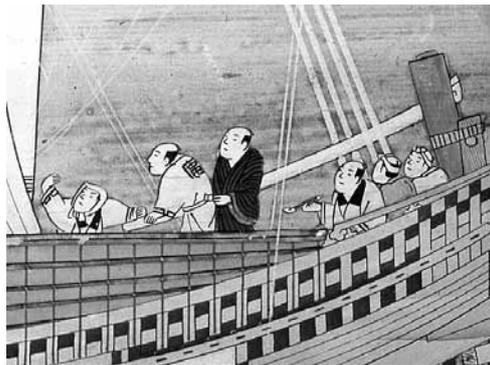
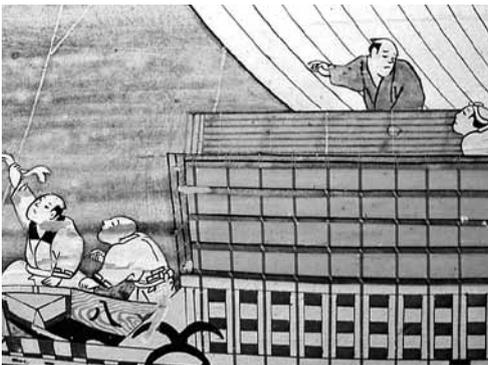


写真 4-4
吉本系 (2代目)

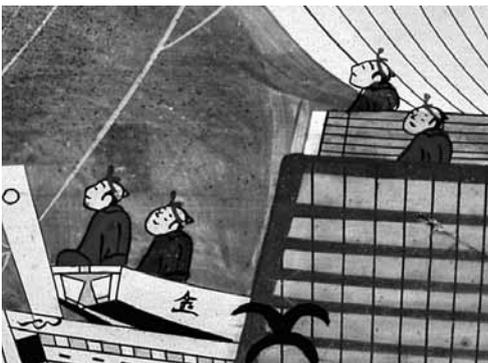


写真 4-5
吉本系 (3代目)

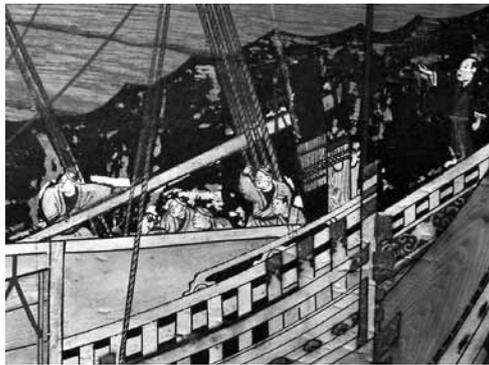


写真 4-6
大和屋雪山

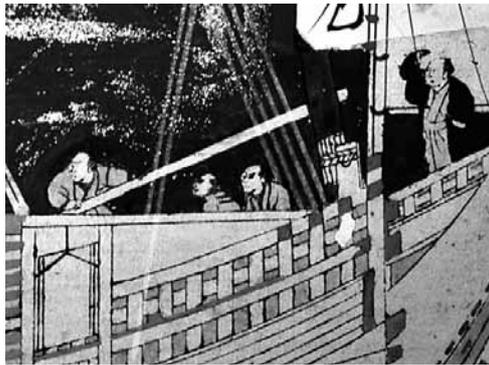
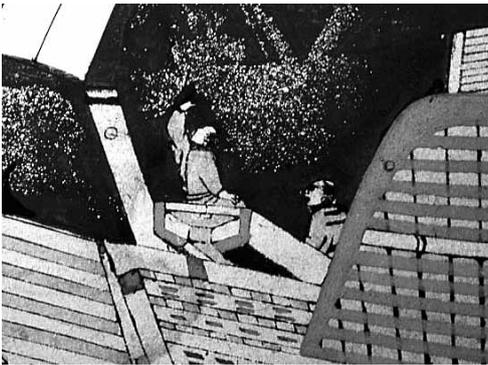


写真 4-7
吉川・吉村・平井系

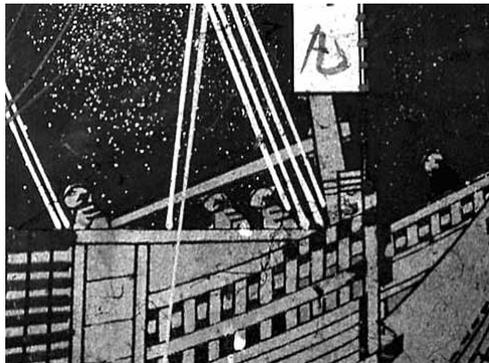
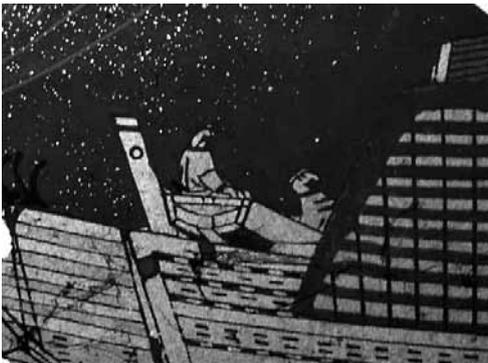


写真 4-8
吉川・吉村・平井系

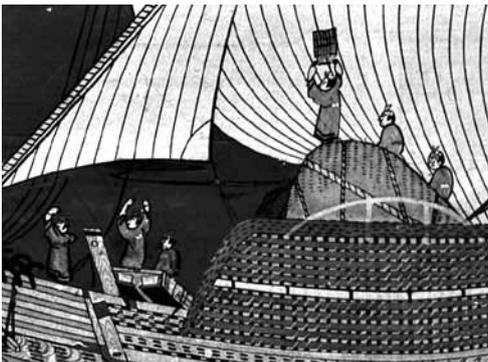


写真 4-9
絵馬藤系



写真 4-10
作者不詳

奉納場所	奉納年	吉本系	杉本系	絵馬藤系	吉川・吉村・平井系	計	作者	奉納場所	江戸時代	明治時代	不明	計
円覚寺	江戸時代	15	10	1	1	27	吉本系	円覚寺	15	0	2	17
	明治時代	0	0	10	2	12		義経寺	0	0	0	0
	不明	2	1	2	1	6		釜野澤稻荷神社	9	1	10	20
	計	17	11	13	4	45		婁月稲荷神社	0	0	0	0
義経寺	江戸時代	0	0	0	0	0	十三神明宮	1	0	1	2	
	明治時代	0	0	11	2	13	計	25	1	13	39	
	不明	0	0	14	2	16	杉本系	円覚寺	10	0	1	11
	計	0	0	25	4	29		義経寺	0	0	0	0
江戸時代	9	4	10	6	29	釜野澤稻荷神社		4	0	0	4	
明治時代	1	0	6	3	10	婁月稲荷神社		0	0	0	0	
釜野澤稻荷神社	不明	10	0	9	1	20	十三神明宮	0	0	0	0	
	計	20	4	25	10	59	計	14	0	1	15	
	江戸時代	0	0	0	0	0	絵馬藤系	円覚寺	1	10	2	13
	明治時代	0	0	25	5	30		義経寺	0	11	14	25
不明	0	0	9	3	12	釜野澤稻荷神社		10	6	9	25	
計	0	0	34	8	42	婁月稲荷神社		0	25	9	34	
婁月稲荷神社	江戸時代	1	0	2	0	3	十三神明宮	2	5	6	13	
	明治時代	0	0	5	6	11	計	13	57	40	110	
	不明	1	0	6	4	11	吉川・吉村・平井系	円覚寺	1	2	1	4
	計	2	0	13	10	25		義経寺	0	2	2	4
江戸時代	1	0	2	0	3	釜野澤稻荷神社		6	3	1	10	
明治時代	0	0	5	6	11	婁月稲荷神社		0	5	3	8	
十三神明宮	不明	1	0	6	4	11	十三神明宮	0	6	4	10	
	計	2	0	13	10	25	計	7	18	11	36	
	江戸時代	1	0	2	0	3	江戸時代	59	76	65	200	
	明治時代	0	0	5	6	11	明治時代	76	76	65	200	
不明	1	0	6	4	11	不明	11	65	65	200		
計	2	0	13	10	25	計	36	200	200	200		

表1 作者別・時代別絵馬奉納数

青森県の船絵馬で署名入りのものは、吉本善京、絵馬藤、吉川芦舟である。無落款の船絵馬には、作風から杉本清舟、吉村重助、平井義重の作品と考えられるものも多くある。青森県内の絵馬について作者別の傾向を把握するため、まとめて奉納されている寺社に奉納された船絵馬の中から、素人が作成したものと、破損等により作者の識別が不能なものを除いた200点について、先に述べた識別方法により、作者毎に統計を取った。(表1・2)

統計では、奉納年を江戸時代、明治時代に大別し、年号の記載にないものについては不明とした。作者は吉本系、杉本系、絵馬藤系に分け、吉川、吉村、平井は作風が似通っているのでまとめて記載した。

奉納された年代をみると、明治時代の奉納が江戸時代より多くなっている。これを時代と作者別に見てみると、江戸時代の奉納では吉本系(25点)と杉本系(14点)が多く、絵馬藤系(14点)も杉本系と並ぶ奉納数である。吉川・吉村・平井系(7点)も少数であるが確認できる。明治時代になると吉本系(1点)、杉本系(0点)が姿を消し、絵馬

藤系(57点)が最も多く、吉川・吉村・平井系(18点)も見られる。時代不明のものを加えると、点数では絵馬藤系が110点と最も多く、ついで吉本系(39点)、吉川・吉村・平井系(36点)、杉本系(15点)となるが、吉川・吉村・平井系は3者を合わせた点数であるため、青森県では絵馬藤系と吉本系が主流であったといえる。

多数の船絵馬が残る寺社の中で、注目されるのは釜野澤稻荷神社である。(写真5・6)この神社は東津軽郡外ヶ浜町三厩に所在する神社である。この神社の絵馬の総数は100点以上で、船絵馬に関しては柳沢良友による詳細な報告がある。この神社の作者別船絵馬の特徴は、江戸時代から明治時代にかけて、船絵馬奉納の一般的動きを反映している点にある。この神社への船絵馬奉納の中心となったのは長門屋伝四郎をはじめとする地元廻船問屋長門屋関係者である。ここで長門屋について報告する資料を持ち合わせていないのは残念であるが、奉納された多くの船絵馬は、地方の廻船問屋の姿を具体的に示してくれる可能性がある。



写真5 釜野澤稻荷神社



写真6 釜野澤稻荷神社内部

3 青森県の船絵馬

(1) 北国船絵馬

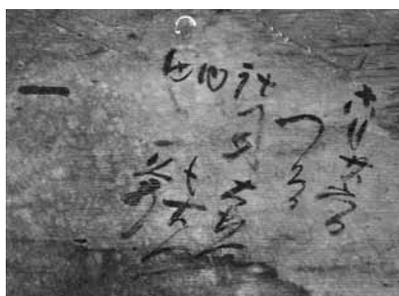
この絵馬は寛永10(1633)年に越前敦賀(福井県)の商人庄司太郎左衛門によって奉納されたものである。記録によると彼は津軽藩の敦賀御蔵屋敷留守居を勤めた人物という。北国船絵馬の裏書には「六月廿六日 つるか 庄司太郎左衛門 同 七右衛門 同 久蔵 一」と記されている。

描かれている船は、江戸時代前期に北部日本海海域で活躍した北国船(ほっこくせん)である。

後にあらわれた弁才船におされて早くに姿を消したため「幻の船」ともいわれる船で、船底部に丸木船の様式を残し、俗にドングリ船と呼ばれる丸い船首、船縁に並ぶ櫂の列などに船の特徴があらわれている。帆柱は一本で、帆はゴザ帆と考えられている。帆の上下に帆桁があり、後の弁才船に比べて帆走性能が劣り、乗組員の数も多く必要であったため弁才船に置き換えられたという。(石井謙治 1995)



写真7 北国船絵馬 寛永10(1633)年 西津軽郡深浦町円覚寺蔵(101.0×154.1) 重要有形民俗文化財



六月廿六日
つるか
庄司太郎左衛門
同 七右衛門
同 久蔵
一

写真9 墨書



写真8 裏面

絵馬は板を3枚横位置に合わせたもので、裏面にはチョウナで削った跡が残っている。

船首の鉄碇の脇に見えるざんばら髪の人物は『魏志倭人伝』に記載された持衰（じさい）と考えられている。持衰とは、航海中頭を梳（くしけず）らず、衣服は垢にまみれ、肉を食さず、喪人のように身を処し、航海の成否を持衰のせいにするというものである。（写真10）



写真10 持衰と鉄碇

（2）春日丸・八幡丸図絵馬

円覚寺に奉納された船絵馬のなかで、春日丸・八幡丸図（41）（天保7年1836）は「吉本善興景映」の落款のある作品で、本県所在の署名入り船絵馬としては最も古いものである。善興景映とは、2代目吉本善京の別名である。

この絵馬は、2艘の船が反航する情景を描いている。風は画面左から右に吹いており、春日丸は左舷後方から風を受けて風下に進み、八幡丸は右舷前方からの風を風上に斜めに進んでいる。風上に向かう航法を間切り（マギリ）といい、帆に風を入れるため帆桁をひねり、右舷側の両方綱を船首方向に引っ張っている様子が描かれている。八幡丸の船首に上げられた小さい帆は、弥帆（やほ）と呼ばれる帆で、出入港時やマギリの時に操船を容易にするために用いるものである。これにより、船絵馬師が船体の描写だけでなく、操船技術面にも深い知識を持っていたことを知ることが出来る。

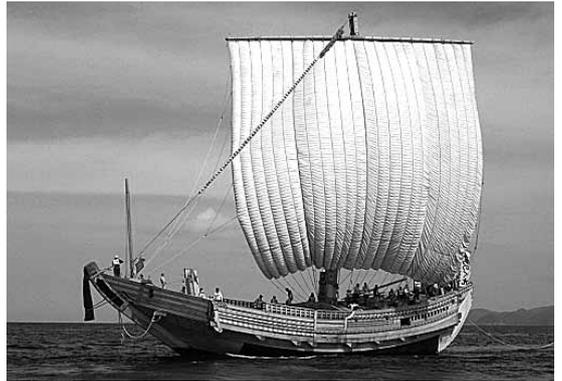


写真11 マギリ帆走を行う復元北前船みちのく丸

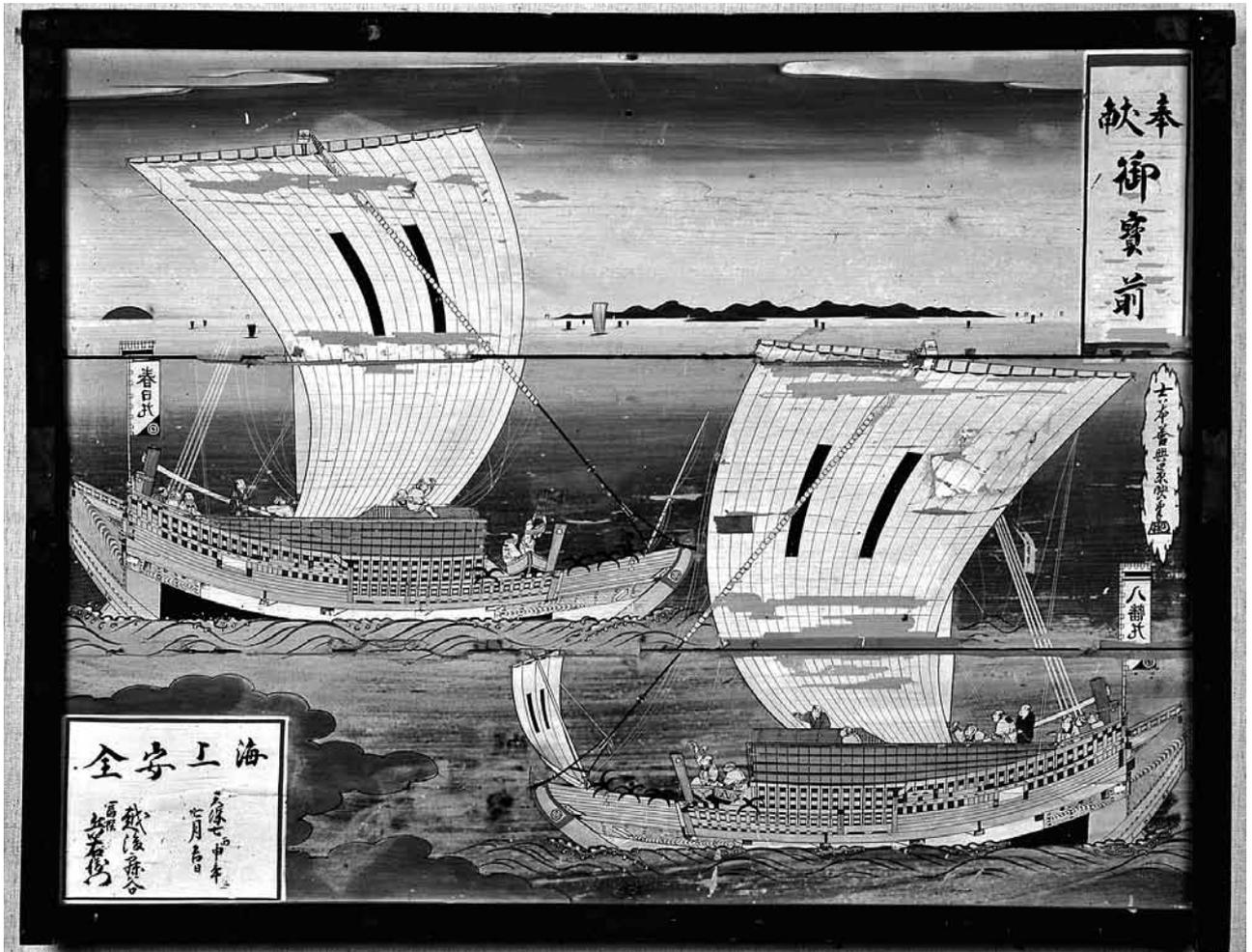


写真12 春日丸・八幡丸図絵馬 天保7(1836)年 西津軽郡深浦町円覚寺蔵 (83.2 × 107.3) 重要有形民俗文化財

(3) 長者丸図絵馬

西国の大名は、参勤交代の際、領国から大坂まで瀬戸内海を御座船を仕立てて往復した。これには、関船と呼ばれる軍船が使用された。東国の大名の中では津軽海峡を渡る必要のあった松前家だけが御座船を運行した。松前藩が所有したのは、北前船と同じ船型の弁才船で、参勤交代の際には御座船の艤装をほどこした。これらの船は、普段は城下の商人に船をあずけられ、廻船として商品の運搬に使用されていた。

この絵馬は、松前藩の御用船長者丸が、御座船のをほどこした状況を描いたもので、他に例を見ない珍しいものである。長者丸は松前の柏屋が藩から預かって運行していた船で、長者丸の絵馬は深浦町の円覚寺に1面、北海道に4面が残されている。奉納者は画面左下に記された「吉三郎」で、円覚寺の長者丸図の奉納者「奥州松前 長者丸吉三郎」と同じ人物である。長者丸は、天保12(1841)年に大坂で造船し、翌年には松前に廻航されている。安政4(1857)年には大坂で船体を改造し、それまでの25反帆から27反帆に船体寸法を拡大している。(石井謙治 1979)

この船絵馬に描かれた長者丸は25反帆であり、改造前の船体と考えられる。さらに、円覚寺奉納の弘化4(1847)年銘の長者丸船絵馬には垣立部分に足洗が装着されているのに対し、この絵馬の長者丸には装着されていない。また、これを制作した吉本善京は3代目で、天保14(1843)年にそれまでの「善興」から「善京」に名を戻していることを考え合わせれば、この絵馬は天保14(1843)年から弘化4(1847)年に至る4年間に制作奉納されたものであろう。

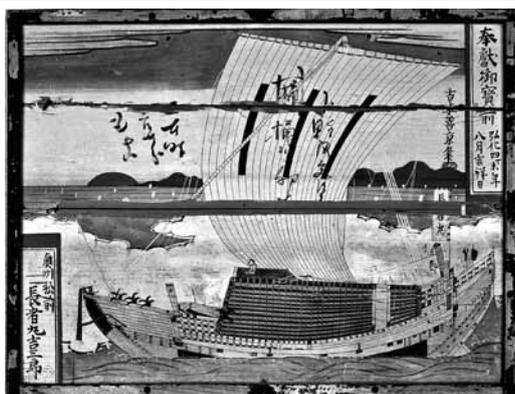


写真14 長者丸図絵馬 弘化4(1847)年 西津軽郡深浦町円覚寺蔵 (54.7 × 73.0) 重要有形民俗文化財



写真13
長者丸図絵馬
西津軽郡深浦町岩崎
武萱槌神社蔵

図3
長者丸御用船艤装図
『松前町史』1988

(4) 難船図絵馬

遭難をまぬがれたお礼に奉納する絵馬の中で、荒れる海を難航している状況を描いた絵馬を難船絵馬と称する。難船絵馬は特に入念に描かれることが多い。円覚寺奉納の叶丸難船図(写真 15)は、帆を下ろし荒海にもまれる難航時に御幣に姿を変えた観音様が救いに現れた情景を描いている。叶丸は、先に紹介した長者丸同様、松前藩の御用船で普段は城下の商人によって回船として使用され、参勤交代時には松前と三厩の渡海に御座船に随伴する船として使用された。この絵馬は、遭難を免れた感謝を込めて、慶応3(1867)年に奉納されたもので、吉川芦舟の署名入りである。これと全く同じ絵馬が、北海道松前町の渡海神社にも奉納されている。

十三神明宮の明通丸難船図(写真 18)は、さらに緊迫した状況を描いている。船を安定させるため、船首から碇を下ろし(写真 19-1)、帆柱はすでに切り倒されている。(写真 19-2)乗組員は髻のモトドリを切って、神仏に一心に祈り(写真 19-3)、そこへ瑞雲に乗って、御幣に姿を変えた神が、救いに現れる(写真 19-4)といった劇的状況を描いている。

円覚寺に奉納された髻額(写真 16・17)は、遭難を免れた御礼に、神との約束に従って、自分の髻を切り、絵馬にして奉納したものである。奉納者は若州(福井県)小浜の住吉丸船中(乗組員)12名と同越後(新潟県)からの乗合(便乗者)8名がそれぞれ奉納したものである。遭難時に髪を切って奉納する約束を交わすのは普通に行われたことであるが、現在まとまって残されているのは円覚寺だけである。



写真 15 叶丸難船図絵馬 慶応2(1866)年 西津軽郡深浦町円覚寺蔵 (58.7 × 78.2) 重要有形民俗文化財



写真 16・17 髻額 嘉永2(1849)年 西津軽郡深浦町円覚寺蔵 (21.9 × 50.1 25.9 × 42.6) 重要有形民俗文化財



写真 18 明通丸難船図絵馬 五所川原市十三 神明宮蔵 (57.0 × 80.0)



写真
19-1



写真
19-2



写真
19-3

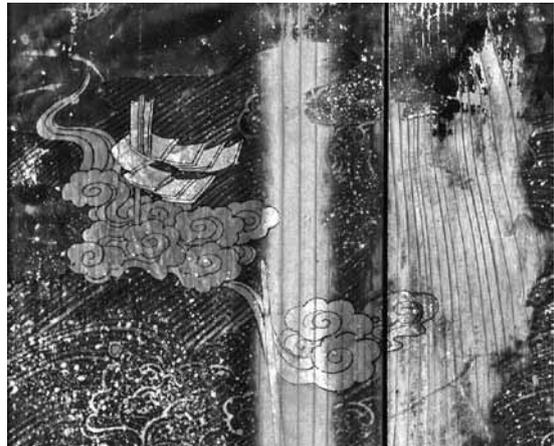


写真
19-4

(5) 白八幡宮絵馬

白八幡宮の船絵馬は、署名入りの優れたものが多い。萬金丸・栄運丸・久宝丸図（写真 21）は、3代目吉本善京の署名入りで、鯨ヶ沢湊の沖に、大津屋の持ち船3艘を配した構図である。これらの船は、鯨ヶ沢の廻船問屋大津屋の持ち船で、奉納者はそれぞれの船の船頭である。前景には鯨ヶ沢の町並みが描かれ、湊内には多くの弁才船が碇を下ろし、立ち並ぶ蔵や弁天崎に設置された常夜灯も見える。この絵馬は、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館が、複製を製作し展示している。

正得丸図(写真 2-2)は、絵馬藤の署名入りで、帆走性能を向上させるため、中央の帆の前後に洋式帆を取り入れており、船頭の出で立ちも洋装で描かれている。弁才船・洋式帆船図(写真 2-1)は、同じく絵馬藤の署名入りで、弁才船と洋式帆船が、反航する状況を描いている。描かれた弁才船の帆装は、本帆と弥帆にスパンカーという洋式の帆装を取り入れている。この絵馬の裏側には、絵馬藤の引札が張られており、それには帆を型どった中に「絵馬 羽子板 えんま藤」と書かれている。(写真 22-1・22-2)



写真20 白八幡宮内部

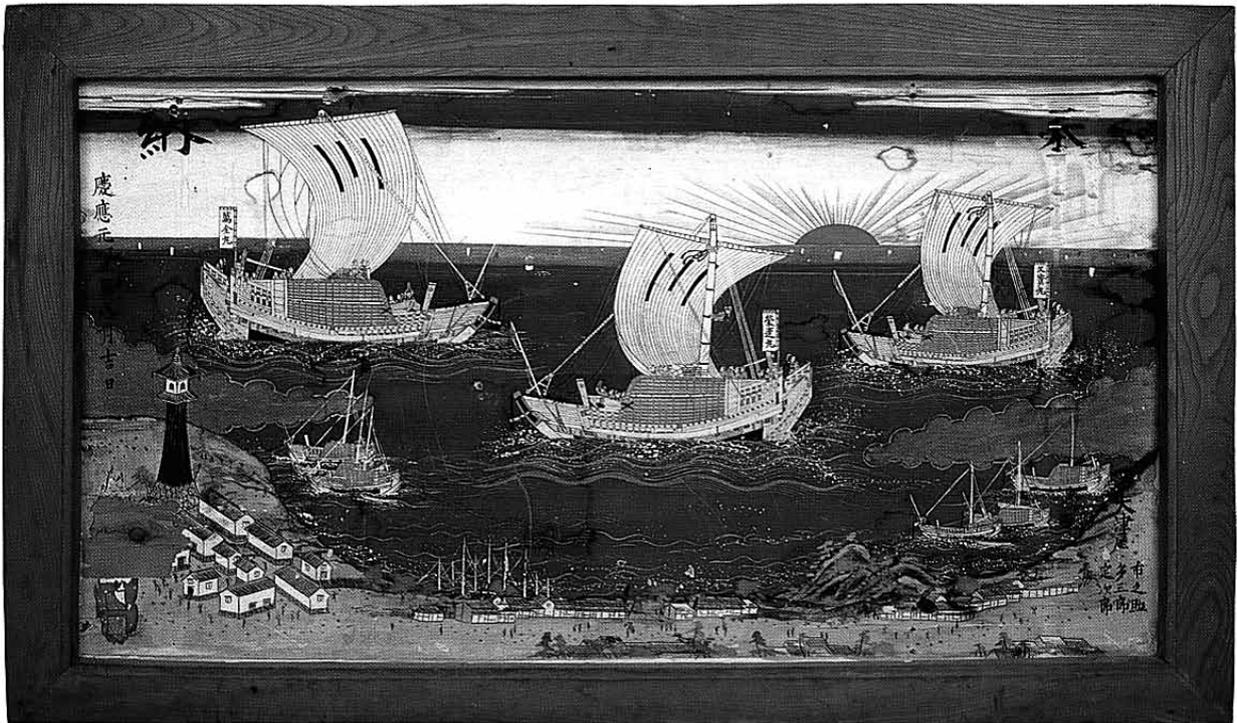


写真 21 萬金丸・栄運丸・久宝丸図（鯨ヶ沢湊）絵馬
慶応 1(1865)年 西津軽郡鯨ヶ沢町白八幡宮蔵 (78.5 × 132.5)



写真 22-1
絵馬藤引き札貼込み状況

写真 22-1
同 拡大図

(6) 脇野沢奉納絵馬

下北半島の西南端、むつ市脇野沢の寺社には、これまで紹介した船絵馬師と別系統の作者による船絵馬が奉納されている。同系統の絵馬は船絵馬5点(写真24・25・26・27・28)、先に紹介した五所川原市の難船絵馬1点(写真18)、えびす絵馬1点(写真23)の7点が確認できるだけである。奉納の時期は慶応年間から明治10年代にかけてで、船体部分の描写は肉筆であるが、波の描写に版画(カッパ刷り)の技法が用いられている。板の合わせ方は1点(写真28)を除いて縦方向に組み合わせられている。描かれている船はいずれも弁才船であるが、難船絵馬を含めて4点(写真18・24・27・28)が蛇腹垣を装着した状態、他の2点が蛇腹垣と五尺(船首部分の波よけ板)を外した状態(空船の場合に多い)で描かれている。また、4点(写真24・25・26・27)が、月明かりの中での航海で、内2点(写真24・27)が湊に入港する場面を描いている。帆は半分下ろした半帆の状態を描かれたものが4点(写真24・25・26・27)で、普段は一人で扱う舵柄に何人もの水主が取り付けいた状態で描かれている。(写真4-10)これらは、嵐を切り抜け無事湊に戻ることが出来た状況を絵馬に描いたものといえる。

描かれた船の大きさは、帆の反数から800石から1200石積みと考えられる。画面構成や人物の描写などを見ると、専門の絵師の手によるものであることは明らかであるが、他地域において同様の絵馬を確認することが出来ず、製作地、製作者等今後の調査に待つ点が多い。



写真23 恵比寿図絵馬
むつ市脇野沢蛸田西宮神社

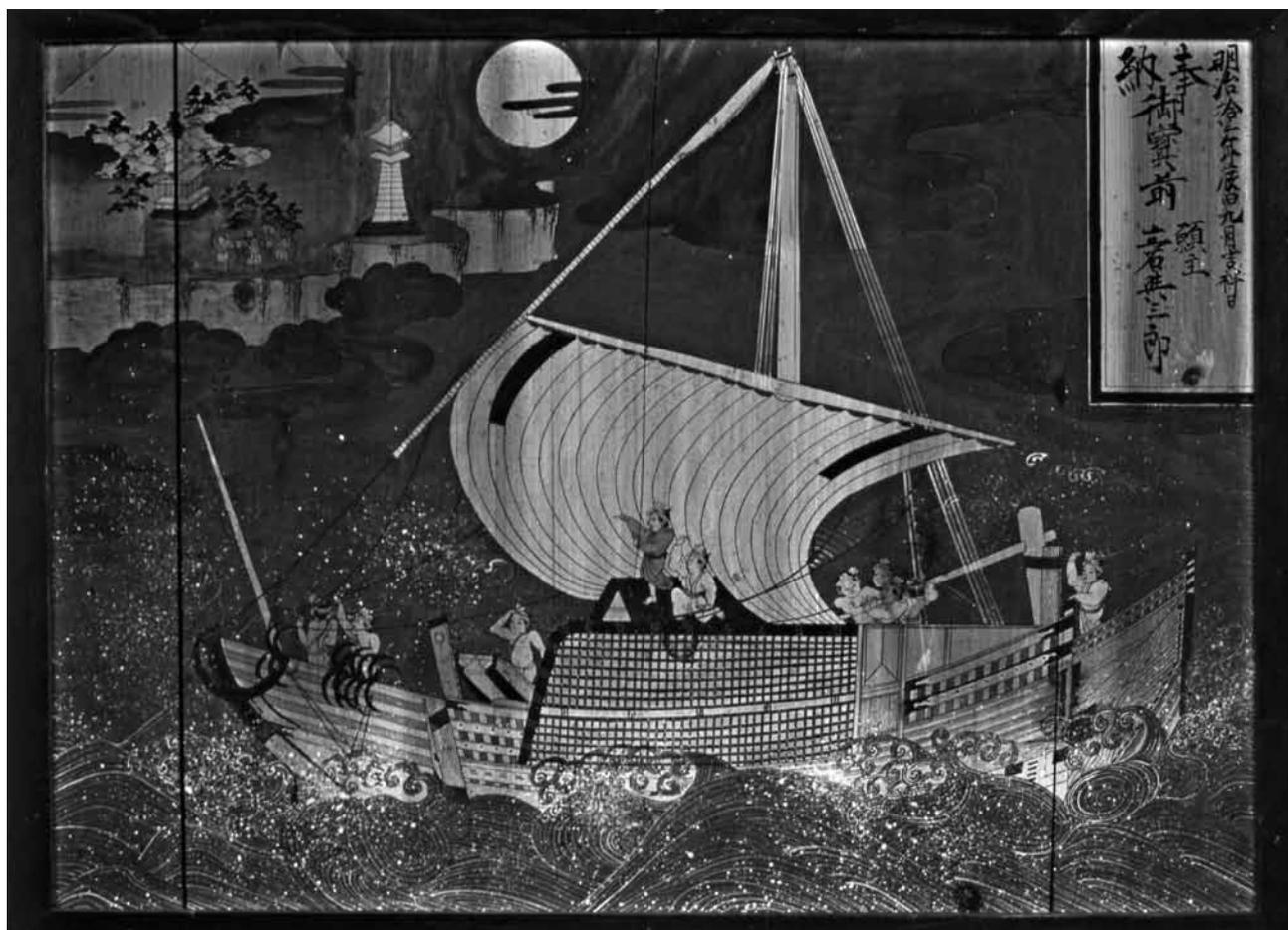


写真24 夜間入港の弁才船図絵馬 明治13(1880)年 むつ市脇野沢悦心院蔵 (56.5 × 77.0)

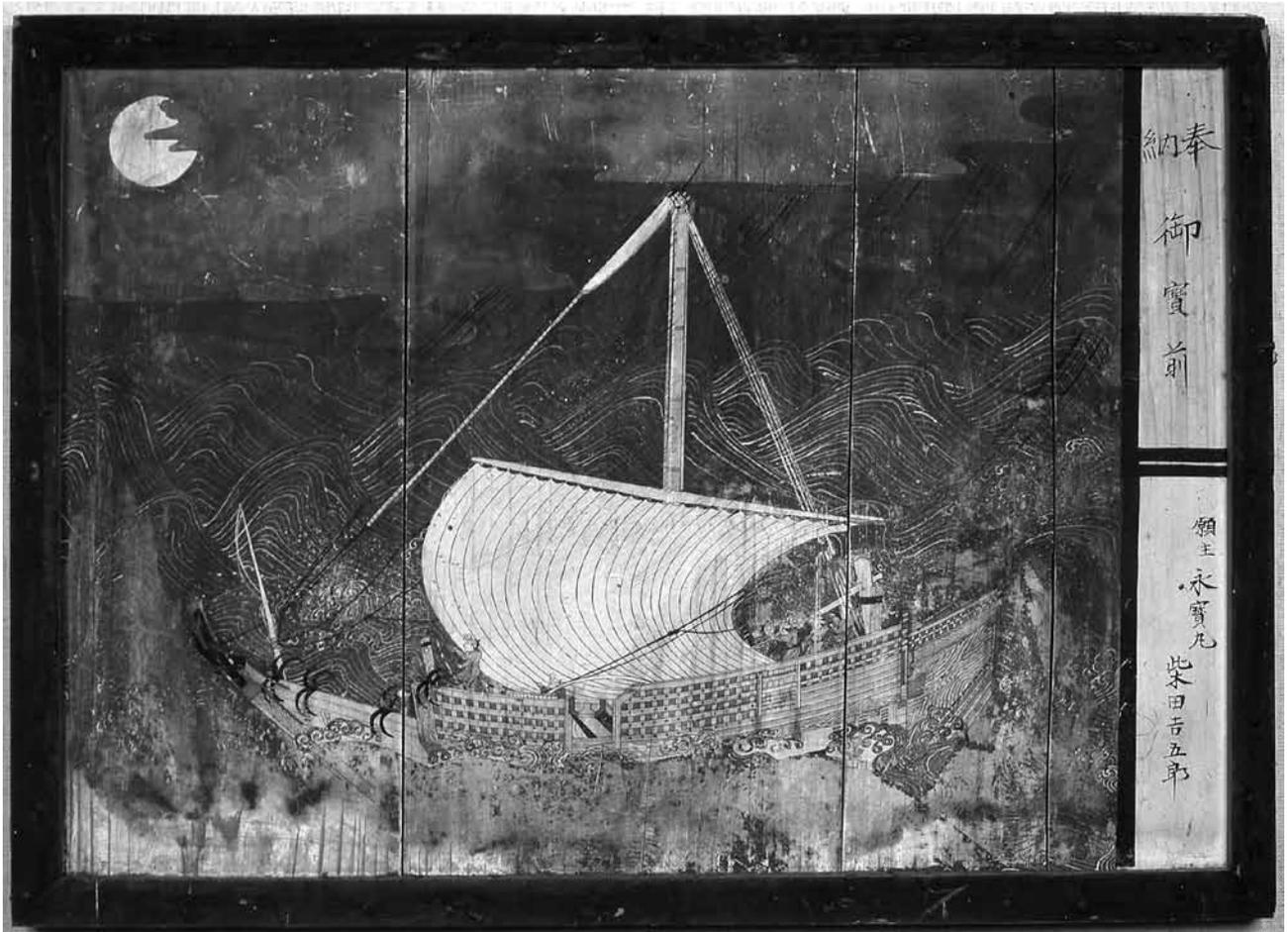


写真25 永宝図絵馬 むつ市脇野沢瀬野巖島神社蔵 (57.0×82.0)



写真26 順栄丸図絵馬 明治13(1880)年 むつ市脇野沢蛸田西宮神社蔵 (57.5×82.5)

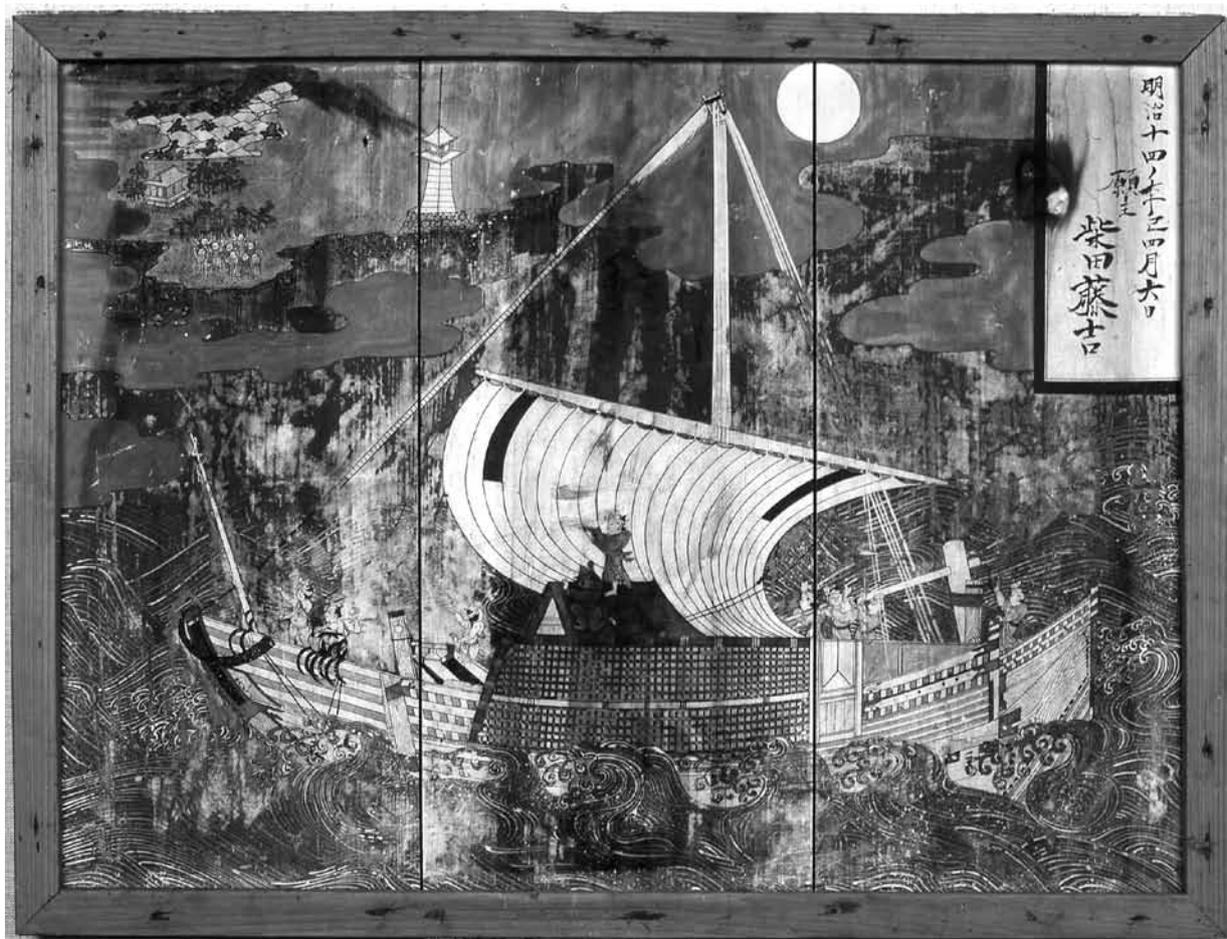


写真27 夜間入港の弁才船図絵馬 明治14(1881)年 むつ市脇野沢瀬野巖島神社蔵 (57.0×82.0)

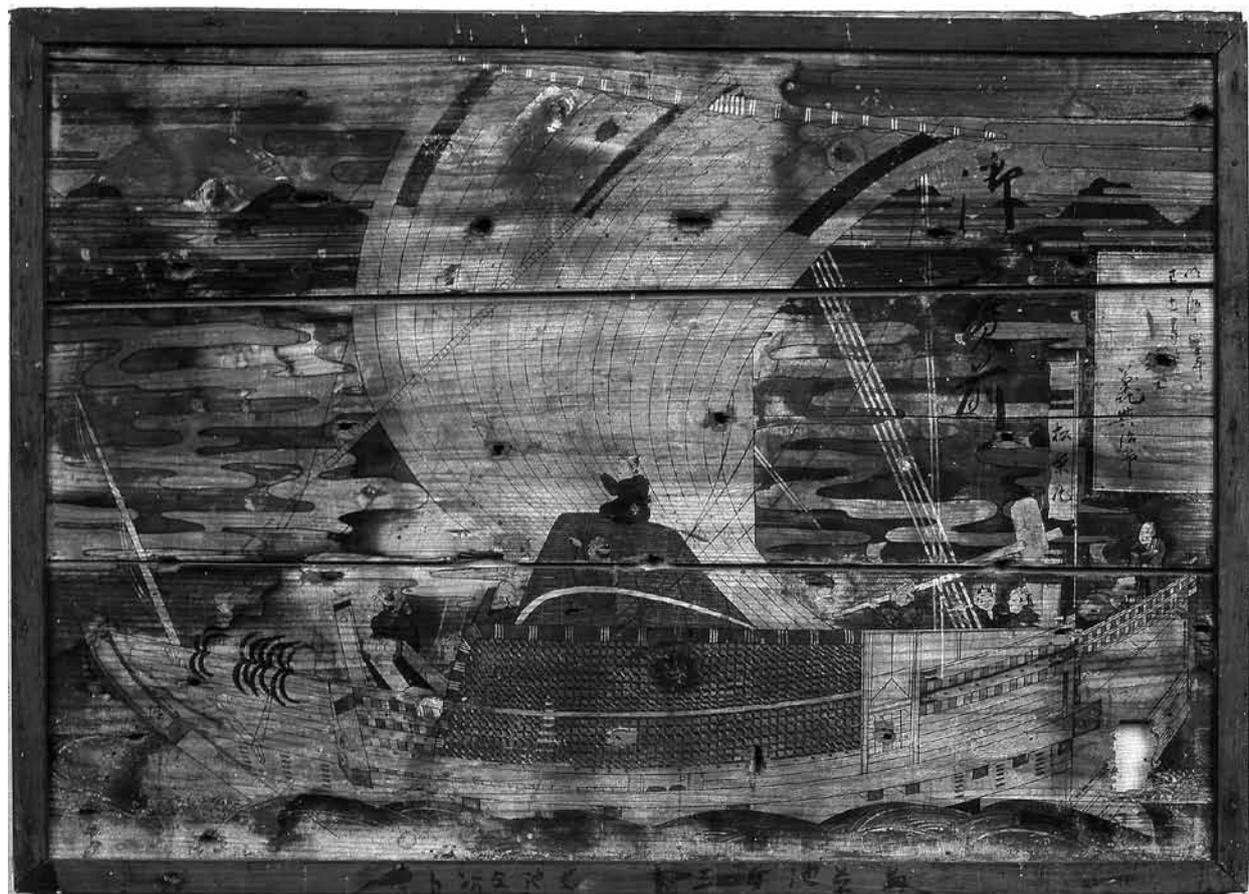


写真28 松栄丸図絵馬 明治14(1881)年 むつ市川内葛沢稲荷神社蔵 (61.0×86.0)

(7) その他の絵馬

青森県内には、吉本善京、吉川芦光、吉川芦舟、絵馬藤の落款入りの武者図絵馬、歌仙図絵馬等が奉納されている。それらの中から主なものを掲載しておくが、署名入りの絵馬の他にも小型の神社参詣図絵馬等に船絵馬師の手になるものがあると考えられる。船絵馬師の実像を探るためにはこれらの絵馬についても、資料の蓄積に努める必要があると考えている。



写真 29 神功皇后図絵馬 吉本善京 東津軽郡外ヶ浜町三厩釜野澤稻荷神社蔵

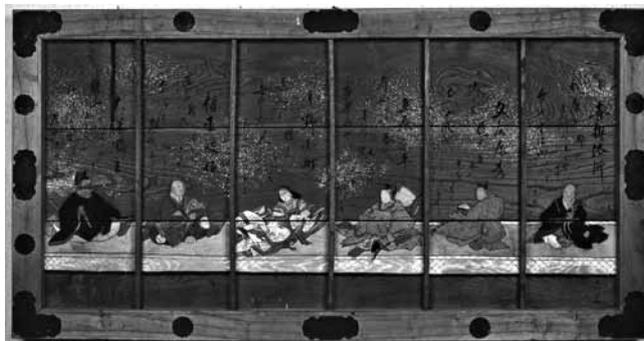


写真 30 六歌仙図絵馬 吉川芦舟
五所川原市十三神明宮蔵



写真 31・32 武者図絵馬 吉川蘆光 むつ市大畑赤川正八幡宮蔵



写真33.34 川中島合戦図絵馬・姉妹仇討ち図絵馬 絵馬藤 下北郡風間浦村易国間大石神社蔵

参考引用文献

石井謙治 1977「船舶画としての船絵馬とその流派」『海と日本人』東海大学出版会
 牧野隆信・刀禰勇太郎・西窪顕山 1977『日本の船絵馬』柏書房
 石井謙治 1979「近世後期における廻船の航海」『日本近世交通史研究』吉川弘文館
 牧野隆信 1989「船絵馬考」『北前船の研究』法政大学出版局
 石井謙治 1995『和船 I』法政大学出版局
 石井謙治・安達裕之 2004『船絵馬入門』船の科学館